

国立国語研究所学術情報リポジトリ

言語地図にみる方言変化・共通語化：LAJDB編

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002694

言語地図にみる方言変化・共通語化 — LAJDB編

鎌水 兼貴
(国立国語研究所)

1. はじめに

言語地図において、話者は「土地の代表」である。通常は、生まれた集落から1度も転居しておらず（近年は範囲が緩和されることが多い）、質的にも、地域のことばや文化に詳しい人が話者に好ましいとされる。そのため言語地理学的調査は、社会調査とは異なり、1地点1話者であっても、回答に対して高い信頼性を与えている。

集落の構成員は時代を経れば必ず入れ替り、「土地の代表」もまた変化する。そのため調査時点での話者の世代をそろえないと、回答が不統一になる可能性がある。しかし言語地図においては、話者の選定作業に労力を要することから、世代の幅については、あまり問題にされていないように思われる。

そこで本稿では、LAJDBを用いてLAJの世代別の言語地図を試行的に作成し、その中から言語変化の観察が可能かどうか、何がわかるかについて考察する。

2. 言語地図内の世代差

2. 1 言語地図とグロットグラム

日本の言語地理学においては、面的にみる言語地図以外にも、線状に世代差をみるグロットグラム（地域×年齢図）という手法がある。これは世代差に着目するため、話者の世代は厳密に扱われる（近年は世代より厳密に生年でプロットすることが多い一方で、地点については等間隔のままという、地理のほうでやや厳密さに欠ける傾向がある）。

国立国語研究所による『日本言語地図（以下LAJ）』『方言文法全国地図（以下GAJ）』の話者は、19世紀末～20世紀初頭に生まれた人々であり、現代では得ることができない時代の日本語方言の地域差を知ることができる。しかし、LAJやGAJの話者の生年には数十年もの幅がある。たとえば、図1の左側のように、ある語形がグロットグラムにおいて「斜めの等語線」を描く地域で、右側の同一地点の言語地図で生年に幅があると、地図B・Cの話者の世代によっては、二つの語形（●・□）が混在しているように見える可能性がある。

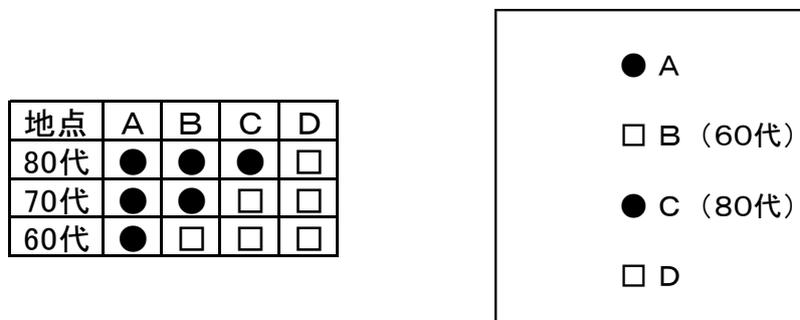


図1・グロットグラム(左)と言語地図(右)

2. 2 G A Jでの検討

GAJは、LAJより調査・刊行時期が遅いこともあり、作成時からコンピュータが使用された。そのため、刊行終了時には、全データが電子データとして公開されている。

鎌水(2010)では、GAJの電子データから、話者を3世代に区分した地図を作成し、元の地図中に複数語形が混在して分布している地域がある場合、話者の世代による影響があるかどうかについて検討を行った。図2は、GAJ第117図「される(受身形)」における、四国地方のサレルとセラレルの世代別分布である。第1世代と第3世代とで大きく変化していることがわかる。関西地方に分布するセラレルの影響を考えると、妥当な変化にみえるが、GAJは日本全国で807地点と少なく、3世代に分けるとさらに地点密度が低くなるため、結局は誤差の範囲になってしまうという問題があった。

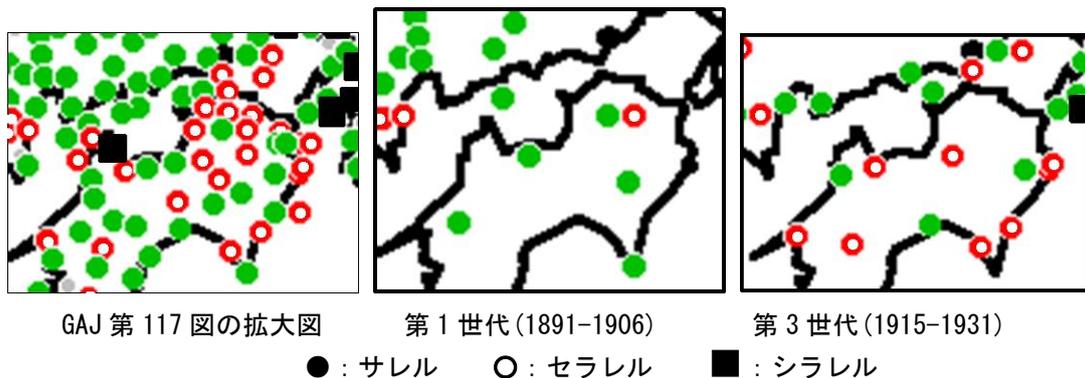


図2・GAJの世代別分布における四国地方のサレル→セラレルの変化

3. LAJの話者の世代区分

3. 1 LAJの話者の時代

LAJは2403地点とGAJの3倍であり、調査時期も1957～1964年と、GAJより約20年さかのぼる。LAJの話者は、1887年以降、1903年以前の出生の男性が推奨されている。下の表に、日本における全国規模の方言調査の一覧を示す。LAJは全体では3回目の全国調査にあたり、話者は、最初の国語調査委員会による調査(1903)の時代に子供だった人たちに相当する。

LAJの話者の基準となる1887年生まれの人は、言語形成期を5～15歳とすると、1882～1902年の言語を反映していることになる。明治維新(1868)以降、教科書検定制度(1886)や国定教科書制度(1903)が制定され、就学率が95%に達した(1905)時代である。LAJの話者は、江戸時代の色が薄くなり、近代化が進行している世代といえるだろう。

(1) 1903	国語調査委員会	→	1905～1906	『音韻分布図』『口語法分布図』
(2) 1908	国語調査委員会	→	1923	関東大震災により焼失
*1927	柳田國男			「蝸牛考」
*1928	東條操			『方言採集手帖』
(3) 1957～1964	国立国語研究所	→	1966～1974	『日本言語地図(LAJ)』
(4) 1979～1982	国立国語研究所	→	1989～2006	『方言文法全国地図(GAJ)』
(5) 2010～	国立国語研究所			(実施中)

表・全国規模の方言調査と言語地図一覧

3. 2 LAJにおける話者の生年分布

前述のように、LAJの話者は1887～1903年生まれであることを条件としている。調査は複数年にわたるため、調査時点で55～70歳の話者という条件もある。LAJ第1集の解説によれば、

「文久・元治・慶応の生まれの人でもよいわけだが、あまり高齢な人は調査の対象として適当でない場合が多い。全国の水準をそろえる上からも、明治20年以降生まれの人が望ましい。」(LAJ第1集『日本語地図解説—方法—』「調査の手引き」p.132)

とあるため、調査開始時点で90歳以上となる江戸時代生まれの人は除いたが、明治初期の話者はある程度許容していたようである。1887年以降という条件も、世代をそろえる面もあつただろうが、同解説で、

「高年者はいったいに精神活動が劣え、知的な作業に適当でない人の率が増加する。」
(同「被調査者」p.24)

とあるように、むしろ高年者の回答の質に対する懸念が大きかったように思われる。

図3にLAJの話者の生年分布を示すが、基準となっていた1887年より前に生まれた話者(図中囲み部分)が297人と多いことがわかる。1878～1886年生まれの話者が259人と、大半を占めるが、最高年は明治初年の1868年生まれである。実際の調査では、話者としての信頼がある場合は、土地のことばに詳しい高齢者をあえて排除しなかったのだと思われる。

一方で若い世代については、基準の1903年より後に生まれた話者は29人しかいない。標準語化などの変化の影響を考慮して、生年の下限は徹底していたものと思われる。

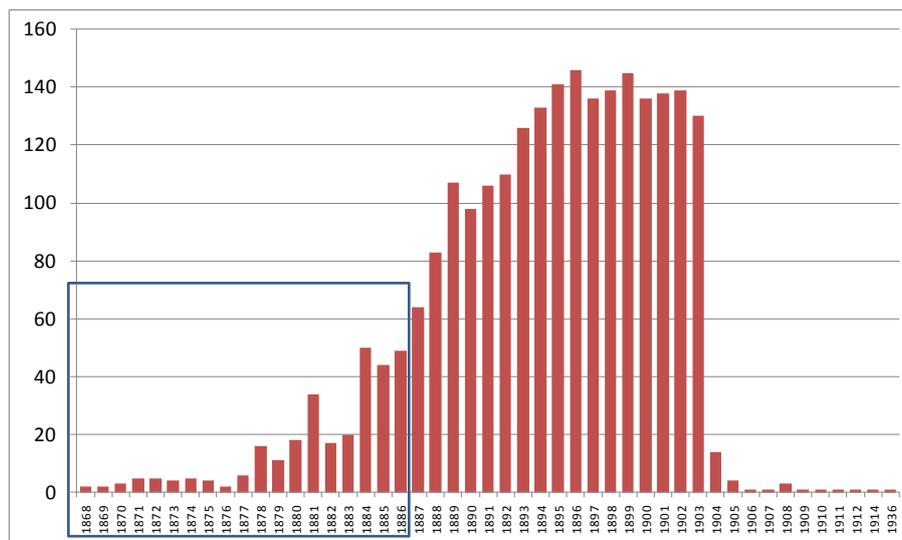


図3・LAJの話者の生年分布

3. 3 LAJの話者の4区分

LAJの話者の生年は1887～1903年という基準が設けられているが、その幅は17年と広い上に、実際1886年以前の話者が多いため、話者間で親子に相当するような年齢差があることになる。

そのため本稿では、LAJの話者を4世代に区分して地図を作成することにする。それぞれを、第1世代(1868～1889年生まれ,551人)、第2世代(1890～1894年生まれ,573人)、第3世代(1895～1899年生まれ,707人)、第4世代(1900年以降生まれ,572人)に分けた。図4に、世代ごとに調査地点をプロットした地図を示す。第1世代で東北南部や九州南部でやや地点が少ないのが気になるが、おおむね全国に均等に配置しているといえるだろう。第1世代に北海道内陸部出身者がいない、といったこともわかる。

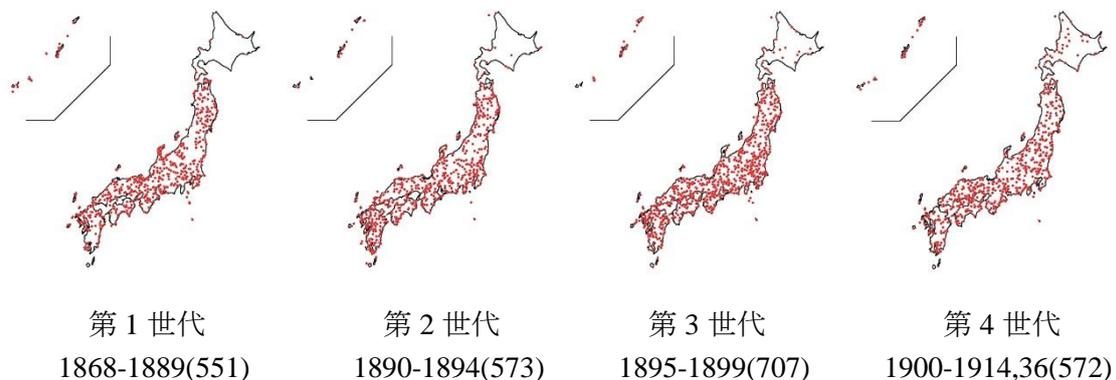


図4・LAJ 4世代区分の話者分布

4. 考察

4. 1 かたつむり (蝸牛)

LAJの中で、一定範囲内に複数語形が混在している地図を探したのち、代表語形に記号をあたえた4世代の言語地図を作成して、考察をおこなう。

まず、LAJ第236図の「かたつむり(蝸牛)」を取りあげる。方言圏論で有名なかたつむりだが、俚言形が多く、関西中心に分布するデンデンムシは、調査当時から全国各地にも分布がみられる。

ここでは関東地方における4世代の比較を行う。関東では、デンデンムシ・カタツムリの2勢力のほかにも語形が多く(マイマイツブロなど)、その他の語形をひとまとまりと捉えると、3勢力が混在している。

図5に、関東地方の部分をも4世代に分けた地図を示す。最も古い第1世代(1868～1889年生まれ)ではデンデンムシはやや少なく、カタツムリもその他の語形と勢力が拮抗している。しかし若い世代(1890～1936年生まれ)では、3勢力の均衡状態にあるようにみえる。デンデンムシが増加し、カタツムリも勢力を維持した結果、その他の語形が徐々に減少しているとも考えられ、第4世代(1900年以降生まれ)ではその傾向が強い。

関東地方において共通語化(デンデンムシも俗語として共通語的に普及か)が徐々に進行しているのではないかと思われる。

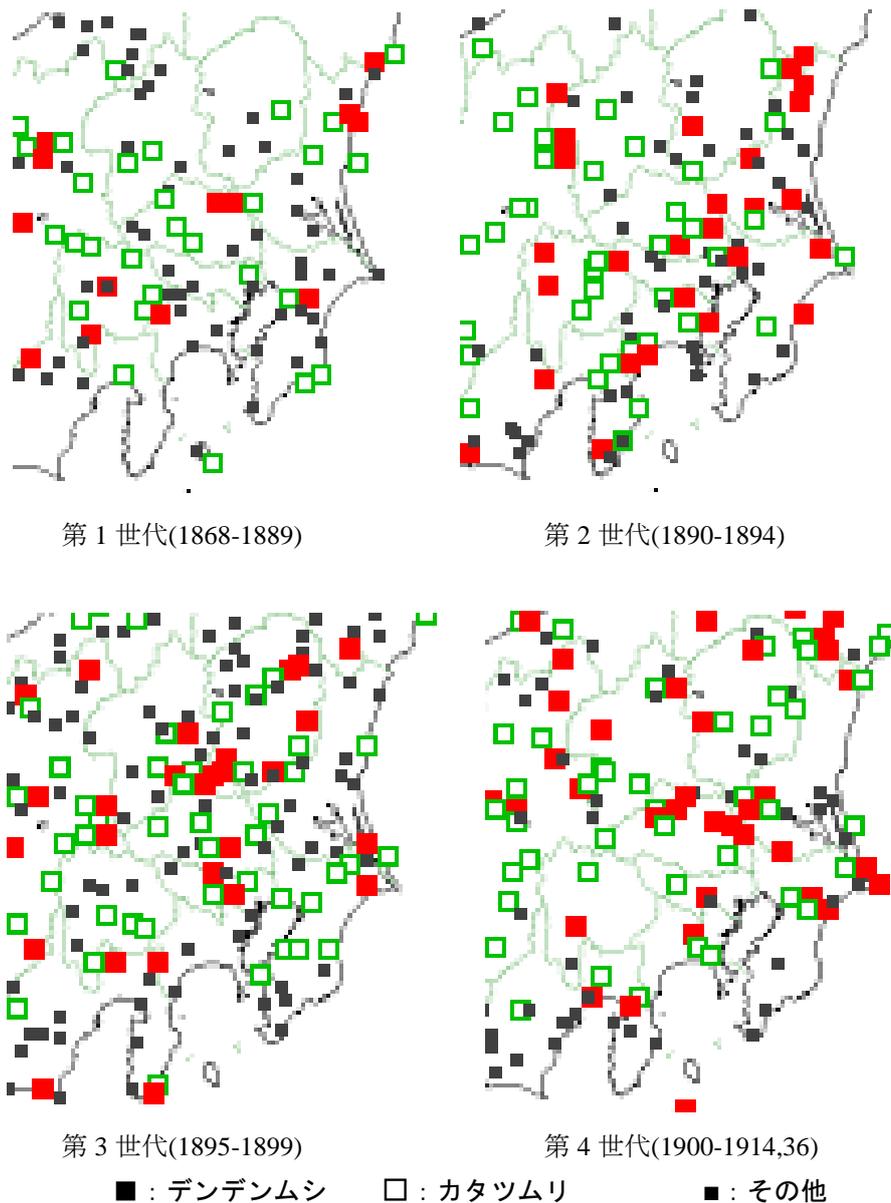


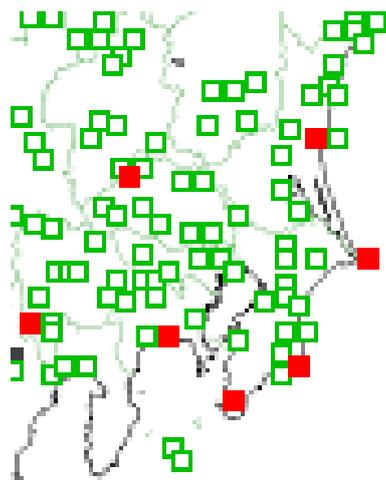
図5・かたつむり（蝸牛）の4世代地図

4. 2 うろこ（鱗）

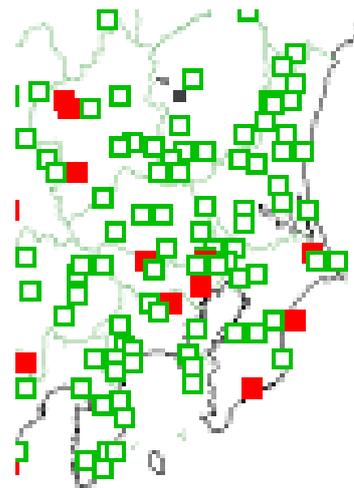
つづいて、LAJ 第217図の「うろこ（鱗）」をとりあげる。東西対立の語形であるが、西日本に分布するウロコが共通語となっている。東日本にもウロコが点在しているため、その点在の状態について、4世代に分けた言語地図から考察する。

図6に4世代に分けた地図を示す。沿岸部では大半の世代でウロコがみられるため、内陸部での分布に着目すると、第1世代（1889年以前生まれ）では少ないが、第2世代以降（1890年以降生まれ）になると増加していることがわかる。

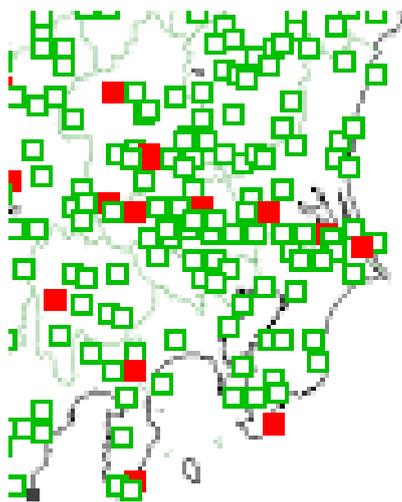
共通語形がウロコであるため、上述のかたつむりと同様に、関東地方において徐々に共通語化が進展しているとみることができる。



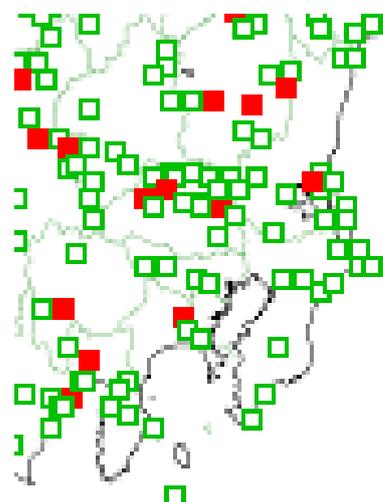
第1世代(1868-1889)



第2世代(1890-1894)



第3世代(1895-1899)



第4世代(1900-1914,31)

■ : ウロコ・ウルコ □ : コケ・コケラ ■ : その他

図6・うろこ（鱗）の4世代地図

5. まとめ

LAJの「かたつむり（蝸牛）」と「うろこ（鱗）」の2語について、4世代に分けた言語地図の分布の違いから、現行の1枚の言語地図に方言変化を内包する可能性について検討した。その結果、明確ではないものの、第1世代（1889年以前生まれ）、第4世代（1900年以降生まれ）といった両極の世代に、他の世代と異なる特徴がみられた。2語とも共通語化の傾向がみられ、第1世代に古い特徴、第4世代に新しい特徴がみられた。このことから、4世代に分けて言語地図を作成する意義はあると思われる。今後もさらに語を増やして検討をしたい。

ただし注意すべき点もある。第1世代は人数の関係で1868～1889年としたが、もともとLAJの話者は1887年以降という原則があるため、551人中、1887年前後の5年間

(1885-1889年)の話者が6割強(347人)を占める。そのため異なった分布に見えていても、実際には第2世代寄りの話者の誤差の反映に過ぎないということも十分考えられる。そのため、全体の分布をみるだけでなく各地点の生年情報を参照して検討する必要がある。

第1世代では、他の世代よりも内部の年齢差が22年と広く、その広さが古い方向であるため、かつての分布の残存が表れやすいとも考えられる。前述のLAJの解説でも、

「19世紀最終年以前出生とでもした方がよかったかもしれないと、いまは考えている。さらに高年者(たとえば1893年以前出生)に限定してもよかったかもしれないが、それでは多分被調査者がさらに選びにくくなるだろう。」

(LAJ第1集『日本語地図解説—方法—』「被調査者」p.24)

と、話者選びの困難は認めつつも、古い世代の結果を残しておけばよかったと述懐している。おそらくは調査を通じて高年層の回答を記録する意義を感じたためであろう。言語地図としては、内部に世代差があることは問題だが、方言資料としてみた場合、古い記録が残ることは好ましいことになる。とはいうものの、その古い語形を適切に位置づけるためには、生年情報は重要であると思われる。この点についても、詳細な検討が必要であろう。

6. 今後の課題

試行の結果自体は、誤差の範囲内という感をぬぐえない面もあった。その原因と今後の課題について考察する。

複数語形の混在地域を選んだのは、冒頭のグロットグラムの説明にもあるように、斜めの等語線、すなわち変化の急激な部分で世代差が出やすいと仮定したからである。しかし、それを言語地図で検証する場合、地点密度と変化の速度についても考えなければならない。言語の伝播速度については、徳川(1993,1996)や、井上(2003)による考察があるが、とりあえず年速1kmと考える。本稿のLAJの4世代区分において、第1世代と第4世代の平均年齢差は17年であるため、もし変化がみられるとしても地点間隔が17km以上あれば、差は見えなくなってしまうことになる。LAJの4世代区分の中で、ちょうどよく合うような速度で変化している語を探すことは困難な作業であろう。

そういった誤差の問題は残るが、試行の2語はともに、共通語化の流れがあり、第1世代においては、他の若い世代の地図と比較して、古い特徴を残していた。共通語化現象は、LAJ以降の世代に急激に進展することがわかっているため、変化の方向については読み取りやすい。第1世代が共通語化の遅れた状態であるとすれば、第1世代の回答を詳細にみることで、かつての分布状態を発掘できる可能性がある。

この場合、現状のLAJの地図データだけではなく、調査整理時のカードデータまで戻ることが重要である。カードには地図作成時に不採用となった「本人は使用しないが聞いたことがある」という情報や、採用語形の「新」「古」といった注記が記録されている。徳川(1993)は、理解語彙が使用語彙より分布範囲が広いことを述べているが、地理的範囲だけでなく、世代的範囲についても同様であると思われる。カード情報から古い使用語形を掘り起こすことで、かつての方言分布の再構成に近づくことができるだろう。

う。親世代の使用情報などは、第2世代以降のデータからも得られると思われる。

カード情報は LAJDB からアクセスできる。回答情報の整理作業にはそれなりの労力を要すると思われるが、そもそも画面上でカードを利用できること自体が労力の大幅な軽減といえる。

以上、言語地図データから言語変化をみる方法について検討してきた。全国規模で明治初期の言語の使用分布を知ることは LAJ 以外で行うことができないものであり、意義のあるものといえるだろう。また、今後整備されるさまざまな言語地図のデータベースにおいても話者の生年情報の重要性を喚起することに貢献すると思われる。

課題点についてさらなる検討を加え、今後も発展させていきたい。

参考文献

- 井上史雄(2003)『日本語は年速1キロで動く』講談社現代新書.
国語調査委員会(1906)『口語法分布図』国書刊行会(1985年の復刻版).
国立国語研究所(1966-1974)『日本言語地図』財務省印刷局 .
国立国語研究所(1989-2006)『方言文法全国地図』財務省印刷局.
柴田武(1969)『言語地理学の方法』筑摩書房.
徳川宗賢(1993)『方言地理学の展開』ひつじ書房.
徳川宗賢(1996)「語の地理的伝播速度」『言語学林 1995-1996』三省堂.
鎌水兼貴(2010)「『方言文法全国地図』における話者の年齢差にあらわれる文法変化」
日本語学会 2010 年度秋季大会予稿集.